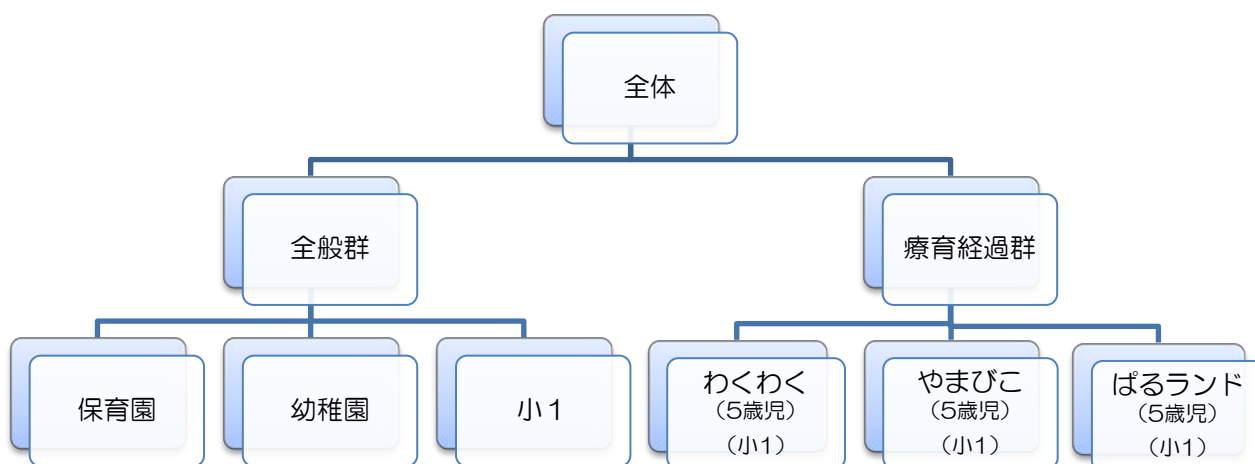


Ⅲ 結果

1 分析に際して

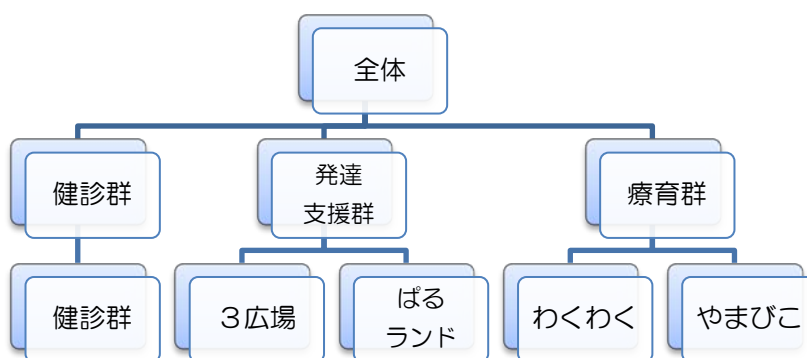
結果については、療育教室である北部子ども療育センター（以下、わくわくと略す）、やまびこ園・教室（以下、やまびこと略す）、発達支援療育事業ぱるランド（以下、ぱるランドと略す）を経過した児を、「療育経過群」、療育を経過せずに幼稚園、保育園、小学校に在籍している児を、「全般群」とした。

結果の分析は、就学前5歳児（年長児）と就学後小1との就学前後による比較、今回調査の5歳児・小1と平成21年度調査の2・3歳児との年齢による比較という2つの観点から行った。



* 今回の調査の「全般群」が平成21年度の調査では「健診群」に、「ぱるランド」が「発達支援群」に対応する。
（下記の「平成21年度の調査対象の分類」参照）

<参考> 平成21年度の調査対象の分類



2 就学前後の比較

ここでは、就学前「5歳児」と就学後「小1」の比較を全般群・療育経過群それぞれについて行う。

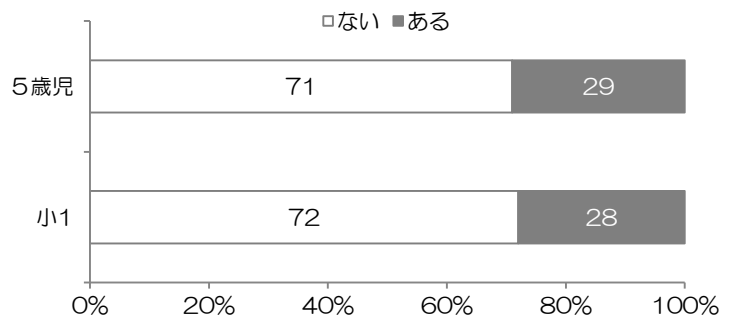
(1) 全般群 (5歳児と小1の比較)

① 子どもの発達への心配と相談

<発達についての心配>

「これまでに子どもの発達について心配したことがあるか」の設問に対して「ある」と回答した保護者は、5歳児、小1ともに約3割いた。そのうち、5歳児では8割弱、小1では7割が「専門的に相談したことがある」と回答していた。

図2-1 発達についての心配の有無

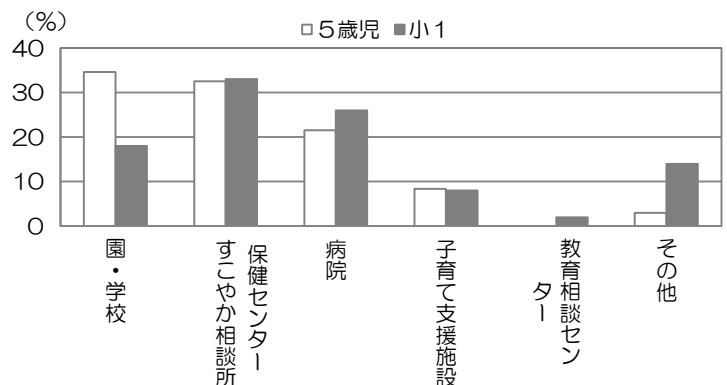


<発達に関する専門的な相談先>

発達に関して相談した専門機関は、5歳児では「在籍園の先生」「保健センター・すこやか相談所」が多く、続いて「病院」であった。

小1では、「保健センター・すこやか相談所」「病院」「学校」の順に多かった。小1の「その他」のうち半数以上が、就学前の所属園（保育園・幼稚園）であった。

図2-2 発達についての相談先



② 学校生活や子育てでの不安や心配

<学校生活での不安や心配>

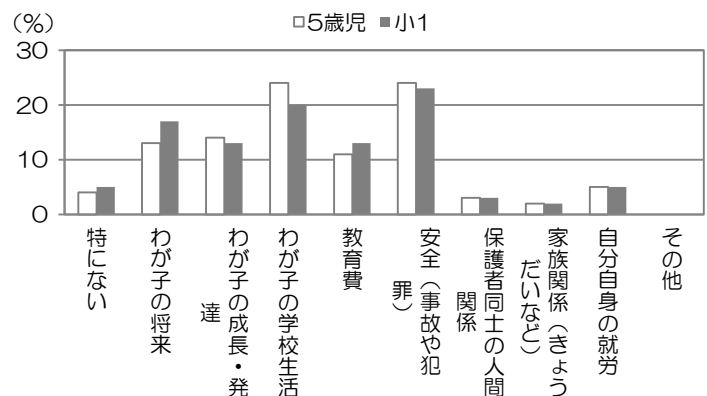
就学前後の差は見られず、「友達関係」「登下校の安全」「学習面」が多かった。

<これからの子育てに関わる不安や心配>

不安や心配に感じる内容は、就学前後で同じ傾向を認め、「安全（事故や犯罪）」「わが子の学校生活」「わが子の将来」「わが子の成長・発達」「教育費」が多かった。

ただし、就学前に比して、「わが子の学校生活」は就学後で減少したが、「わが子の将来」や「教育費」は逆に就学後で増加していた。

図2-3 これからの子育てに関する不安や心配



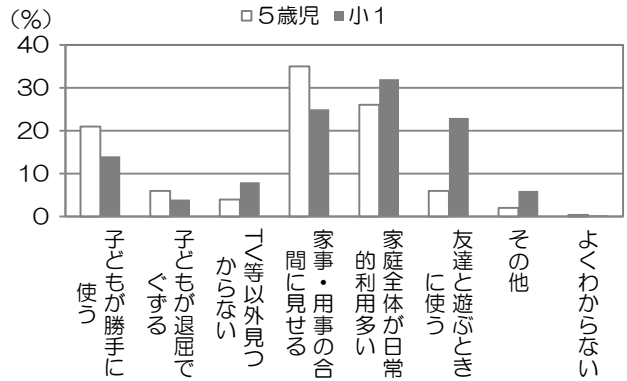
③ 家庭での過ごし方

<テレビ・ゲームなどの使用時間>

就学前後で使用時間に大きな差はなく、いずれも2時間未満が全体の7割強であった。

使用が2時間以上になる理由については、就学前は「家事や用事の合間に見せているため」が最も多く、就学後では「家庭全体として日常的にテレビやゲームの利用が多いため」が多かった。また、小1では5歳児に比して、「友達と遊ぶときに使うため」が3倍以上増加していた。

図2-4 TV等の使用が2時間以上の理由



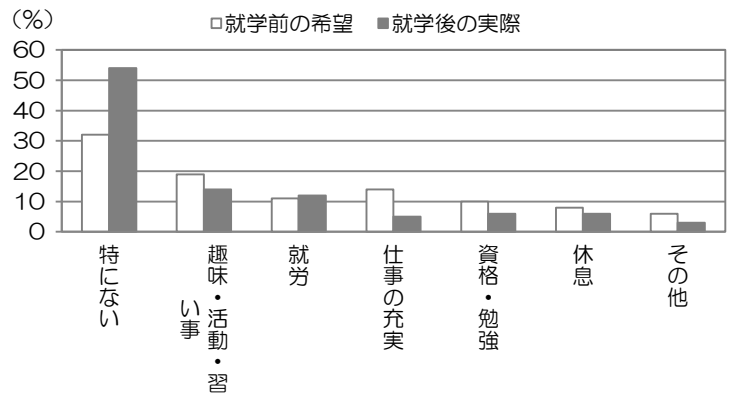
④ 母親自身について

<子どもの入学後にやり始めたいこと・やり始めたこと>

「子どもが小学校に入学したらやり始めたい（やりはじめた）ことがありますか？」の設問に対して、5歳児では7割以上の保護者が、図2-5に示す内容（「特にない」以外）を回答していた。

一方、子どもの小学校入学後、実際にやり始めたことが「特にない」と回答した保護者は5割強であった。

図2-5 入学後やり始めたいこと・やり始めたこと



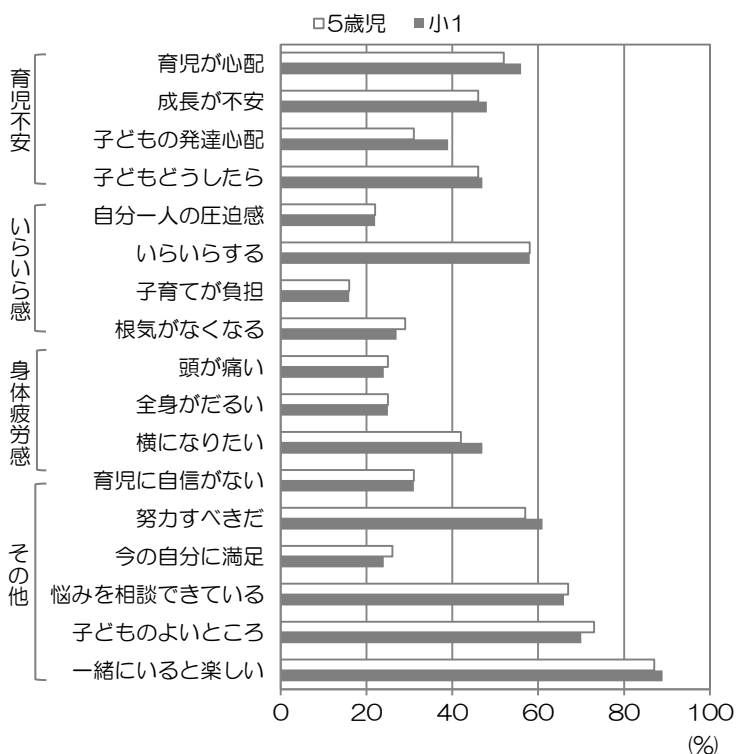
<子育てで感じるいろいろな疲労の軽減に役立つこと>

5歳児、小1で大きな差はなく、いずれも「時間的な余裕」「家族の協力」が多かった。

⑤ 母親の育児意識・心身の疲労度

図2-6のように、小1では5歳児よりも「育児についていろいろと心配なことがある」「子どもの発達が気にかかる」「横になりたい」「自分はもっと努力すべきだと思う」の回答が増えていた。

図2-6 母親の育児意識・心身の疲労度



⑥ 地域や教育機関に対して、就学後の支援として希望するもの（自由記述）

保護者の属性ごとの回答者数と全体に対する割合は以下の通りであった。

	回答者数	全体に対する割合
保育園5歳児	164	43%
幼稚園5歳児	152	42%
小1	88	12%

<5歳児について>

保育園、幼稚園の保護者に共通して多い内容は、「登下校の安全体制」「教育体制の充実」であった。特に、保育園では「保育体制の充実」、幼稚園は「放課後や休日の子どもの活動・場所の保障」の回答が多かった（図2-7、8）

以下に代表的な意見を記載する。

教育体制の充実

- ・一人ひとりに合わせた教育
- ・学力のサポート（補習授業）
- ・子どもの内面への配慮
- ・特別支援教育の充実、支援員の充実
- ・土曜日登校を実現してほしい
- ・担任の熱意

保育体制の充実

- ・児童クラブの開設時間の拡大
- ・指導員の人材と数の充実
- ・一時保育

<小1について>

図2-9のように、「教育体制の充実」「登下校の安全体制」に関連する希望が多かった。

具体的な内容は以下のものであった。

- ・少人数制クラスや支援員の配属。
- ・子どもの内面への配慮。
- ・発達障害の知識、認識を深めてほしい。
- ・習得できていない科目は、長期休みに課外授業を行うなど、きっちり理解するまで学ばせてほしい。
- ・個別フォロー、個別支援計画の作成や学校指導者側の援助技術の習得。指導者へのメンタルヘルス、指導者の負担軽減を目的とした第三者機関の参入など。

図2-7 就学後に希望する支援(保育園)

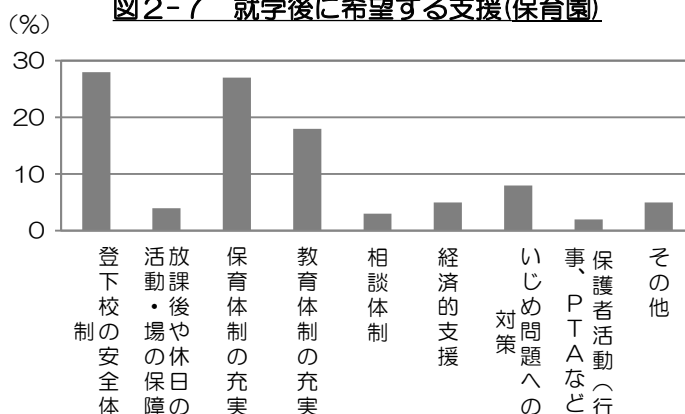


図2-8 就学後に希望する支援(幼稚園)

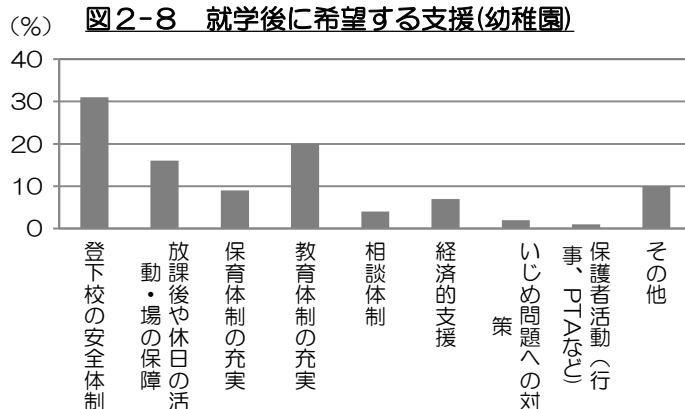
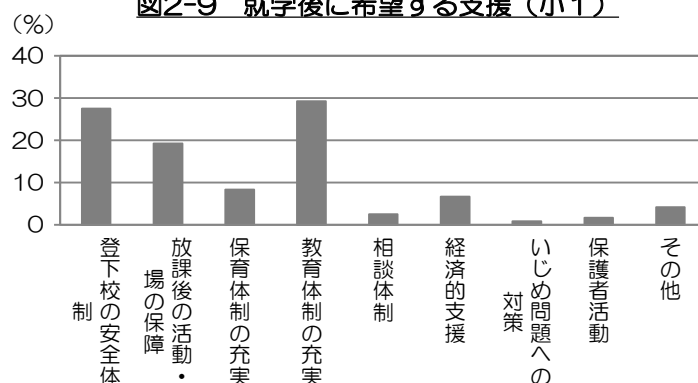


図2-9 就学後に希望する支援(小1)



(2) 療育経過群 (5歳児と小1の比較)

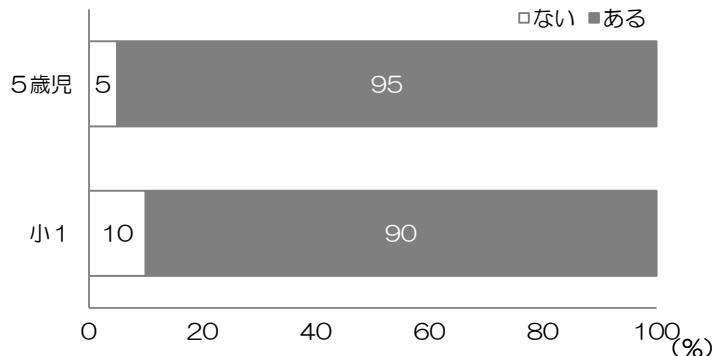
① 子どもの発達への心配と相談

<子どもの発達について心配なこと>

9割以上の保護者が「これまでに子どもの発達について心配したことがあるか」の設問に対して「ある」と回答した。

そのうち、5歳児では9割、小1では8割が「専門的に相談したことがある」と回答し、相談先としては、「園・学校」「保健センター・すこやか相談所」「子育て支援施設」がほぼ同率、次いで「病院」が多かった。

図2-10 子どもの発達についての心配の有無



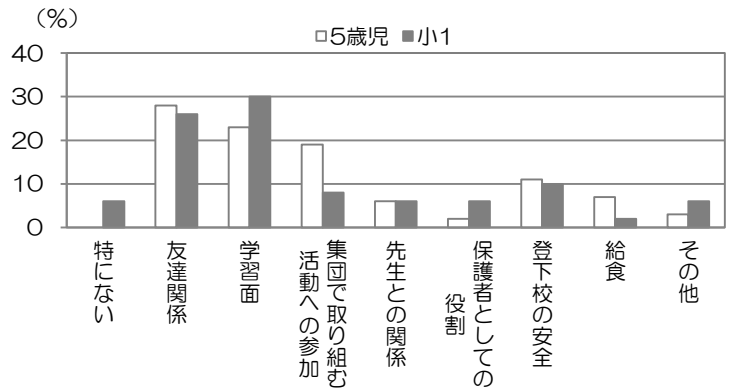
② 学校生活や子育てでの不安や心配

<学校生活での不安や心配>

5歳児では「友達関係」が最も多く、次いで「学習面」「集団活動」であった。一方、小1では「学習面」「友達関係」が多かった。

小1では5歳児に比して、「学習面」の回答が増え「集団活動」は減っていた。

図2-11 学校生活での不安や心配

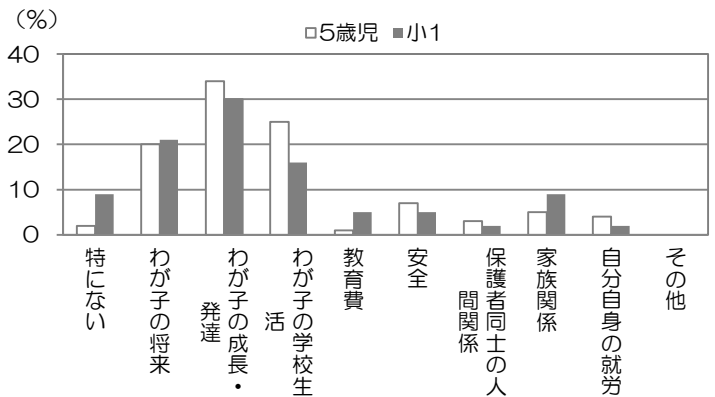


<これからの子育てに関わる不安・心配>

5歳児、小1ともに、「わが子の成長・発達」「わが子の学校生活」「わが子の将来」の回答が多かった。

小1では5歳児に比して、「わが子の成長・発達」「わが子の学校生活」の回答は減り、「特になし」「教育費」が増えていた。

図2-12 これからの子育てに関わる不安・心配

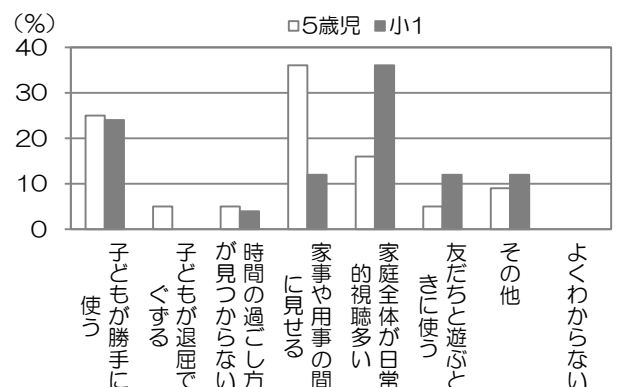


③ 家庭での過ごし方

<テレビ・ゲームなどの使用時間>

5歳児では、「1～2時間未満」が多く、小1では「1～2時間未満」と「2～4時間未満」が同率で多かった。2時間以上の使用理由について、5歳児では「家事や用事の間に見せている」が多く、小1では「家庭全体として利用が多い」が多かった。

図2-13 TV等の使用が2時間以上の理由



④ 母親自身について

<子どもの入学後にやり始めたいこと・やり始めたこと>

5歳児について「子どもが小学校に入学したらやり始めたいことがありますか？」の設問に対して、8割弱の保護者は、何らかの内容（「特にない」以外）を回答していたが、小1では、5割強の保護者が、子どもの入学後、実際にやり始めたことは「特にない」と回答していた。

<子育てで感じるいろいろな疲労の軽減に役立つこと>

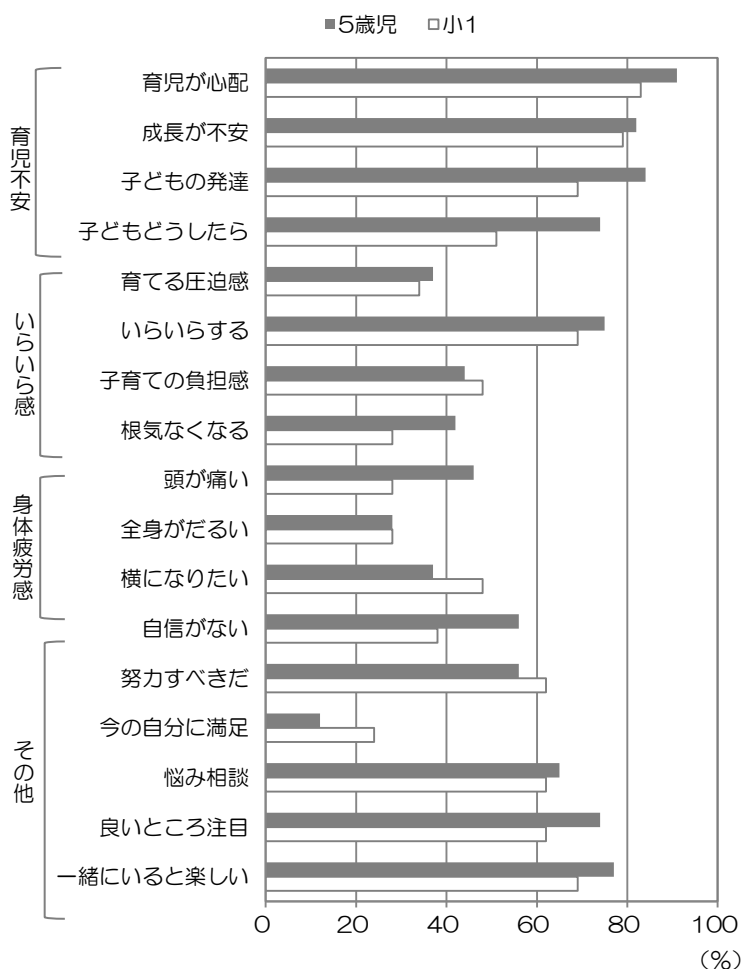
5歳児では「時間的な余裕」が3割強と最も多く、次いで「家族の協力」が2割強、「子どもの成長や変化」が2割であった。一方、小1では「家族の協力」が4割弱で最も高く、次いで「時間的な余裕」が3割、「子どもの成長や変化」が1割であった。

⑤ 母親の育児意識・心身の疲労度

全体として、「育児についての心配」「どのように成長するか不安」「子どもの発達に気になる」「いろいろな事」「悩みを相談できている」「子どものよいところに注目できる」「子どもと一緒にいると楽しい」を自覚している保護者が多かった。

小1では5歳児よりも「今の自分に満足している」「横になりたい」と回答した割合が増えていた。一方、「子どもの発達が気になる」「子どものことでどうしたらいいかわからない」「根気がなくなる」「頭が痛い」「育児に自信がない」「子どものよいところに注目できる」の回答は減っていた。

図2-14 母親の育児意識・心身の疲労度



⑥ 地域や教育機関に対して、就学後の支援として希望するもの（自由記述）

保護者の属性ごとの回答者数と全体に対する割合は以下の通りであった。

	回答者数	全体に対する割合
5歳児	43	75%
小1	10	34%

<5歳児について>

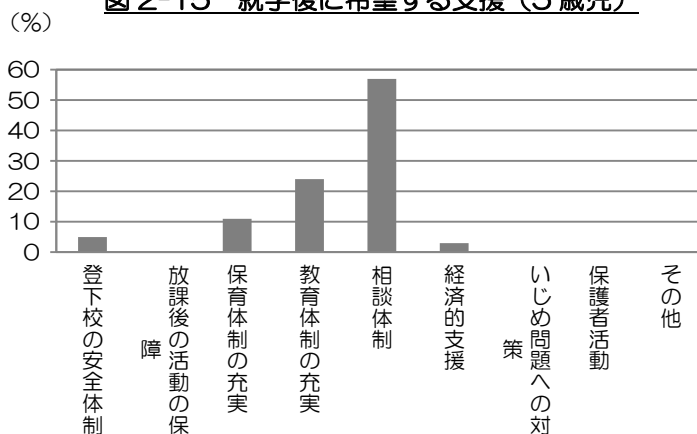
図2-15のように、「相談体制」に関する内容が回答者の約6割を占めていた。

具体的には、

- ・就学後も定期的に相談を受けたい
- ・就学前後で支援が手薄になるのが困る

のように、就学前後および就学後の相談体制の充実を希望する内容がほとんどであった。

図2-15 就学後に希望する支援（5歳児）



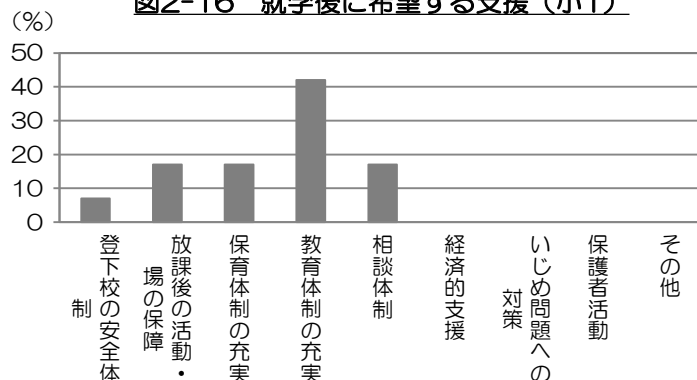
<小1について>

図2-16のように、就学後は、「教育体制の充実」に関連する内容が多かった。

具体的には、以下のような意見があった。

- ・就学前の療育のような手厚い支援を、学校でもしてほしい（学習、生活面の両方から）。
- ・支援級に入級してもことばの教室のような専門機関に通いたい。
- ・学習、生活面両方からのフォロー、ケア。
- ・支援員さんを増やしてほしい（各クラス一人は希望）。
- ・先生からわが子の学校での様子を知らせてもらい、どう支援していくのかを話し合ったり成果を聞く機会を増やしてほしい。
- ・こちらがアクションを起こさないと学校での子どもの日々の姿が伝わってこないことが不安。
- ・巡回している支援の先生や学校内にある専門の先生からのお話を直接聞く機会を設けてほしい。

図2-16 就学後に希望する支援（小1）



前述した全般群と共通して、「体を使った屋外での遊びを保障してほしい」「経済負担のかからない習い事や補習や体験学習などを行ってほしい」などの、「放課後や休日の子どもの活動・場所の保障」に関する要望も多かった。

3 平成 21 年度調査との比較

ここでは、平成 21 年度に実施した調査と同じ項目について、2・3歳児と5歳児・小1とで、3年を経過してどのような変化が見られるのか、経年的な比較をした。

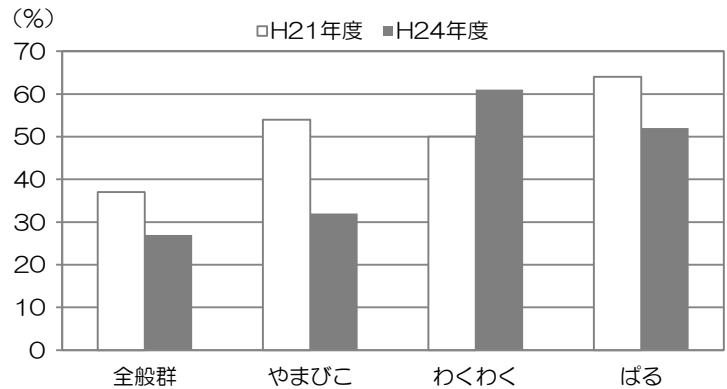
*1 共通する項目は、テレビなどの視聴・利用時間と、母親の育児意識・心身の疲労度の2つである。

*2 全般群は全く同一の対象児ではないが、療育経過児は3年前の調査と同じ対象児である。

(1) テレビ・ゲームなどの使用時間

2時間以上のテレビ・ゲームなどの視聴・使用時間についてみると、全般群が4割から3割に減っているのに対し療育経過群は5割とほぼ変わらず、2人に1人は2時間以上視聴していた。

図3-1 経年比較 TV等の使用2時間以上



(2) 母親の育児意識・心身の疲労度

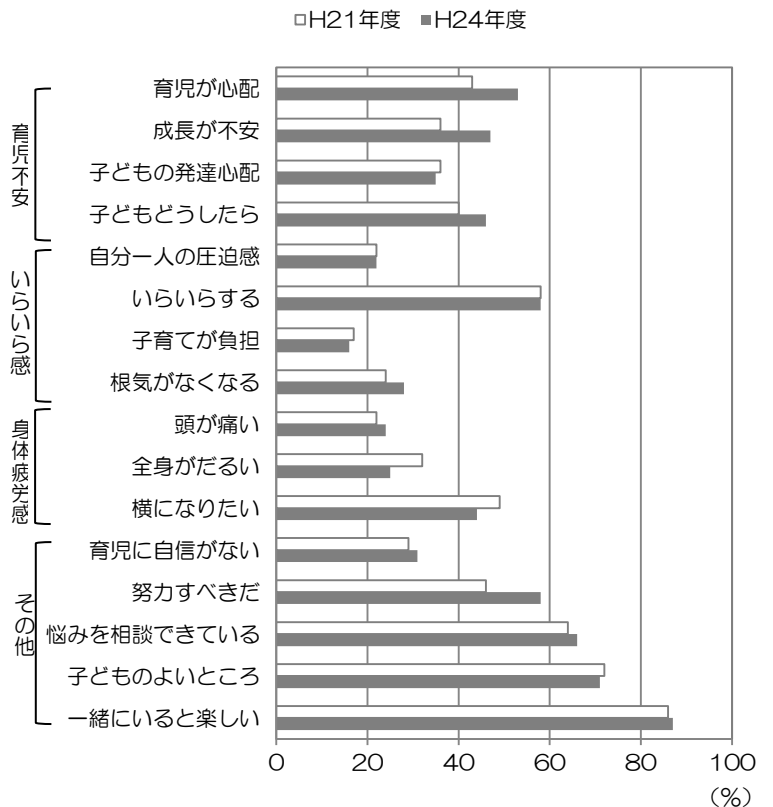
① 全般群

図3-2のように、全般群は、2、3歳児の時期に比較して、全体的にほとんどの項目で変化がなかった。

その中でも、「全身がだるい」という疲労感は子どもの成長により減少し、子どものよいところに注目でき、「子どもと一緒にいると楽しい」と感じる、子どもへの肯定的な視点は高いまま維持されていた。

その一方、わが子の成長や育児に対する心配、子どもへの対応の戸惑い、「自分をもっと努力すべきだ」の割合は増加していた。

図3-2 経年比較 母親の育児意識・心身の疲労度(全般群)



② 療育経過児

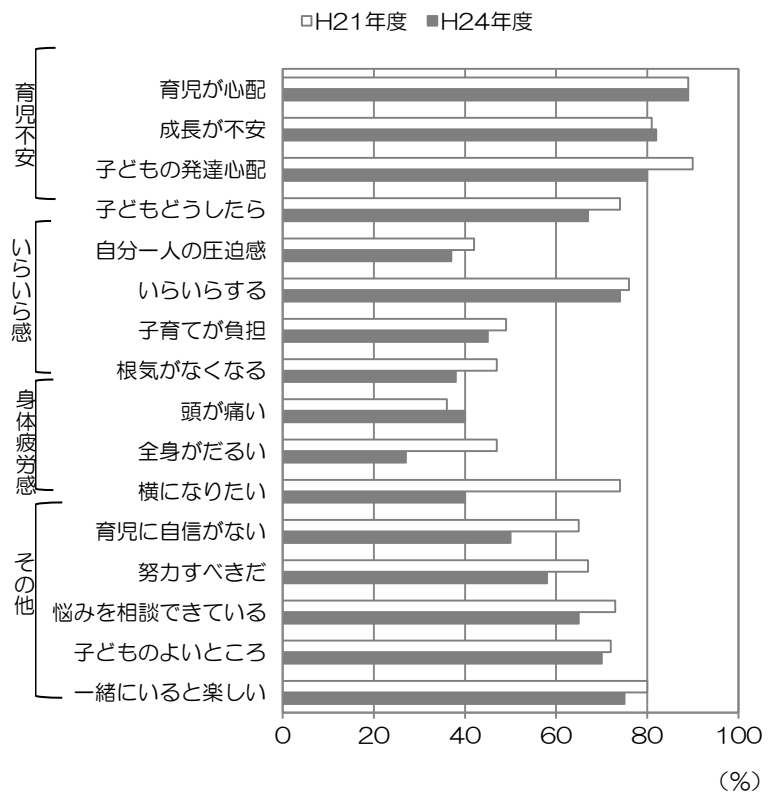
やまびこ・わくわく・ぱるランドの総計で比較すると、図3-3のように、療育経過児はほとんどの項目が2, 3歳児の時期と変わらないか低下していた。

3年というスパンで見ると、「全身がだるい」、「横になりたい」の身体疲労感は著しく低下、「育児に自信がない」、「子どものことで自分をもっと努力すべきだ」も低下していた。

また、「子どものよいところへの注目」や「一緒にいると楽しい」と感じる子どもへの肯定的な感情は、それほど低下せずに全般群と同様に高く維持されていた。

同時に、子どもの成長や発達への不安や心配、子どもへの対応の戸惑い、いろいろな感も高いまま続いていた。

図3-3 経年比較 母親の育児意識・心身の疲労度 (療育経過児)



4 療育についての振り返り

療育経過群については、全般群と共通の設問に加え、療育に通所していた当時（多くは2～3年前）を振り返って療育に関する思いや希望を自由記述にて質問した。

5歳児と小1を合わせた結果を述べる。なお、自由記述については、その内容ごとにカテゴライズして分析した。

（1）療育を利用してよかったこと

各教室とも「同じ悩みをもつ保護者との交流」という回答が最も多く約半数を占めた。続いて「スタッフと相談できた」「子どもの理解、対応の仕方を学んだ」「子どもの成長」「保護者自身の成長・心の安定」「集団生活の体験・準備」「福祉制度などの知識を得られた」があげられた。

＜療育を利用してよかったこと＞ （自由記述）

- ・子どものことを理解し、よいところを見つけられるようになり焦りがなくなった
- ・子どもの障害への理解や接し方などを学ぶことを通じて自分の子どもに対する感情を整理していった
- ・子どもの成長により自分自身の気持ちにゆとりができた
- ・同じような悩みを持つ親と話ができた
- ・先生に悩みを相談でき不安が軽減できた
- ・色々な制度や知識が増えた

（2）療育を利用して負担に感じたこと

療育全体では「特になし」という回答が一番多かった。続いて、共通してあげられたのが、「きょうだいへの対応」であった。きょうだいを連れての通所やきょうだいの送迎とのやりくりなどの大変さを訴える声があげられた。

＜療育を利用して負担だったこと＞ （自由記述）

- ・親子登園が週2回あり、家事との両立が大変で時間の余裕がなかった
- ・保護者室にずっといることがしんどかった。保護者同士のつきあいが上手にできなかった
- ・下の子を連れて行ったり、預けたりするのが大変だった
- ・きょうだいの幼稚園の送迎と並行しての通所だった事が体力的にしんどかった
- ・療育施設の場が遠かったので通う負担があった
- ・バスに子どもを乗せる時の人の目が気になった

（3）療育に望む支援

「療育を利用中、あったほうがよかったと思う支援はどのようなものですか？」の設問に対しては、図4の通り「特になし（「十分だった」を含む）」が一番多く、その他、「きょうだいへの支援」、「スタッフと話せる機会の充実」、「子どもの支援内容の充実」、「登園回数の増加、通園距離など体制面での改善」があげられた。具体的な内容は、次の通りである。

<療育に対する希望> (自由記述)

- 個々に合わせた支援
- 発達相談や面談の機会をもう少し増やしてほしい
- 保護者同伴の日をもう少し減らし、単独登園日を増やしてほしい
- きょうだいのサポート。親子登園時の下の子を預かってくれる場所や、下の子が思い切って遊べる部屋があればよい
- きょうだいの行事などに参加できるよう登園日以外での保育の保障。
- 祖父母と一緒に参加できるものがあればよかった
- 土日のヘルパーさんなどの支援

